

〔古事記垂仁〕故天皇不知其之謀而枕其后之御膝爲御寢坐也爾其后以紐小刀爲刺其天皇之御頸

○中泣淚落溢於御面

〔三代實錄陽成四十一〕元慶六年三月廿七日己巳天皇於清涼殿設酒宴慶賀皇太后四十之算也○中貞

數親王舞陵王上下觀者感而垂淚

〔明匠略傳日本上〕一慈覺大師諱圓仁俗姓壬生氏下野國都賀郡人也○中先年依別勅寶幢院常濟

授與兩部大法未許灌頂貞觀六年正月十三日大師洗手漱口著袈裟令諸弟子暫避屏外召常濟引

入內床口誦真言手結印契授與曰是名密印灌頂常濟不堪歡悅流淚如雨

〔三代實錄光孝五十〕仁和三年二月十四日戊午正三位行中納言兼民部卿陸奥出羽按察使在原朝臣行

平重抗表曰○中臣情見於辭淚隨於汗宸發鑒實恩許罷官不任悃幅之至重以奉表以聞

〔拾遺和歌集戀十五〕善祐法師ながされて侍けるととき母のいひつかはしける

なく涙よはみなうみとなりななんおなじなぎさにながれよるべく

〔源氏物語幻四十一〕御かたゝに稀にもうちほのめき給ふにつけては先いとせきがたき涙のあ

めのみふりまさればいとわりなくていづかたにもおぼつかなきさまにて過し給

〔源氏物語維本四十六〕野山のけしきまして袖の時雨をもよほしがちにともすればあらそひおつる

木の葉の音も水のひゞきも涙の瀧もひとつ物のやうにくれまどひてかうではいかでかかぎ

りあらん御命もまばしめぐらひ給はんとさぶらふ人々はこゝろぼそくいみじくなぐさめき

こえつ、おもひまどふ

〔十訓抄十二〕十月ばかり月あかりける夜經信卿を宗として宗俊卿政長朝臣院禪慶禪長慶樂

人三四人宰相中將隆綱管絃者にはあらねどもすきものにて伴ふ又少將俊明など各車に乗て

五節命婦世をそむきてゐたる嵯峨の家に行にけり○中略秋風樂三反蘇合みなつくして萬秋樂